真理の雨降る浄土あり

1

およそ三ヵ月振りに津の三眺荘に戻った山岸は、この日使いを出して一応事件の判決を聞いた。山岸会事件の判決は過失致死の二名を除いて、十二名全員有罪、執行猶予（山岸は三十五年十月十九日に無罪として起訴猶予）というもので、これで事件がほぼ片づいたと同じことであった。

津からさらに岡山へ向かう二十八日～三十日の三日間の間は、三眺荘に事件関係者が大勢つめかけている。それら関係者たちと共に談合を重ね、夜は二時間も眠られぬほどに神経は張りつめている。いくら話しあっても、時間は足りないのである。したがって津では身も心もくたくたになり、疲労が極に達した挙句に、五月一日に岡山の研鑽会場へ向かっているのである。

一体に山岸は精神的にどこか虚弱なところがあった。とてもニワのように意志堅固、抜群の持久力というふうにはゆかないのである。山岸の死に際して遺体保存のためにやってきた岡山大の解剖学の教授は、遺体をみて、「とても六十歳とは思えぬ、四十代の肌つやをしている」といったそうであるが、そうした外見とは別に山岸の肉体は、どこか蝕ばまれているようなところがあったのである。

若い頃には七年間結核を病んで、そのために絶えず気持が暗うつな方向に向かおうとするのを、反

対に転換することで病も愈（なお）し得たことを述べているが（弟の千代吉も結核を患っているが、兄のことは知らないといっている）、一度病んだ青春病が肉質そのものに変化を与え、後年にも影響していたのかもしれない。そのせいか山岸は始終自分の生命的危険を感じ、注意を払いつつも、一方では絶えずこの世に未練はないと投げやりなことばを放っていた。

頭が痛むことも時々は訴えていた。名古屋を立つ間際にも、「ちょっと頭が痛む」といっていて、医者に心電図をとってもらったところ、眼底にやや出血がみられるので、「眼圧を検査してもらえ」といわれていたのであるが、ニワが同道しなかったので、山岸は途中まで一人でいって引返してきている。彼は結局これが原因で世を去るが、試験用紙まで手にしながら真に措しいことであった。

それでも津を出た山岸はやる気十分で途中、昔の幼なじみに出あってハッパをかけている。その友人というのは詩人で、小学校は一番で出たものの中学へはいかないというので、山岸もそれに習って進学しなかったという程の間柄にある人だった。汽車を乗り換えに降りた途端その友人と顔を合わせて、すぐさま京都駅のラーメン屋に入って、食事をしたのであるが、その際の二人の会話が面白い。

山岸「政治をどう思うかね」

詩人「めちゃくちゃや」

山岸「あんた政治家にならんか」

詩人「政治畑の人間じゃないよ」

山岸「教育はどう思うかね」

詩人「教育はなっとらん」

山岸「では教育者にならんかね」

詩人「ぼくは教育者じゃないよ」
「それでは労資は？」「宗教は？」といくつも重ねていって、相手が何れも批判し、しかも自分自身は改革する意志のないことを確かめると、山岸はニワの方を向いていった。
「あのね、この人は賢い人でね、小さい時からずっと賢い人で、天才といわれるほど賢い人でね、偉いんだよ、この人は……」
そのことばを聞いて当の詩人は「まア、そこまでのこともないけど」と否定しながらも、内心は満更でもないような気分になっていたが、その顔をみつめながらつづけて山岸は、
「あのね、世の中みな悪いといっている人は、ちっとも悪くない人でね。世の中はこんな賢い人ばっかりなのよ。ぼくたちは賢くないから忙しいね、さあいこうか」
といいざま立ち上がり、相手にサヨナラもいわずにラーメン屋を出ていった。
京都から岡山へ向かう汽車は、満員のすし詰列車で、途中やっと席が空いて坐れたものの、この時はもう疲労困憊（こんぱい）の態である。二人とも腰かけると山岸は、ニワに自分の膝を枕にして休むことを促す。だがニワとすれば先生の方こそそうしたいくらいなので、断わろうとすると、山岸はむりやりニワを押さえつけて自分の膝の上に頭を置いた。
夜、岡山駅につくと、先遣隊の娘夫婦らが出迎えている。とりあえず駅前の旅館の一室で風呂に入ったりして小休止、九時過ぎこの日午後一時より開かれている児島郡興除村（現岡山市内）中畦（なかうね）の石井康彦方会場へ向かった。石井宅では岡山各地の会員六十名が久し振りに集まっていて、「懐しい心の通う研鑽会」を行っていた。山岸夫妻はこの研鑽会で久々に旧会員に出会い、夜中の二時頃までつきあっている。

そして研鑽会が終ると、会員の石田徹宅に宿泊した。石田宅に泊ったのは石田のお爺ちゃんがもう長くないと、しきりと山岸に会いたがっていたことによる。爺ちゃんはその晩は体が汚れていてはすまないからと、行水を使って山岸を待っていた。二日目は疲れているからと休んでいたが、そこへ会員やら何やら尋ねてきてやはり応対せねばならない。二人とも充分休養はとれなかった。
翌日、五月三日のことであるが、山岸はニワが便所に立ったのを見届けると、すぐさま席を立ち、ニワが用を足している入口で、低い天井に手を当てがったまま、早急には意味不明の不思議なことばを口にした。
「あのね、奥さん、うちの奥さんわね、綺麗になりますよ。美しくなりますよ」
ニワも茶目っ気を出して、「ほう、そしたらまるで今までは美しくなかったみたいですね」と応ずると、山岸は「どうでしょうかね、さあどうでしょうかね」といって一旦は離れていった。それがまたすぐ引返してきて、今度は前かがみにしゃがんで、片手を床について、片手で、「こんなに、こんなに」と手をぎんぎらの踊りのように回しながら天井にさしのべ、さらに両手を腹の辺りで動かしながら、
「こんなに、こんなに光り輝くんですよ。うちの奥さまわね。これからこんなに光り輝くんですよ。うちの奥さまわ。本当ですよ。本当に光り輝くんですよ」
といった。ニワとすればその時は用を足す方に気をとられていて、それほど深刻な意味には受けとっていなかった。
三日の日は雨降りである。その雨の中を、付近のタクシーを呼んで、再び山岸夫婦は研鑽会場に向かった。実は一日の研鑽会に引続き、今度は有安市二方に会場を変えて、二日から三日間の予定で

「一体高度研鑽会」が開かれていたのである。この会場での参加者は二十数名、夕方午後四時半頃立寄った山岸は、いつどんな場合にも誰とでも仲良くやってゆくことの問題について話をした。

2

この「一体高度研」での山岸の談話は、基本的にはやはり仏教的人間観を踏まえてのものとはいえ、仲々にユニークなものである。要するに、山岸はこの世に人間嫌いなんかいないことを語った。それは心理的にも、哲理的にもそうなのであって、手っとり早く「誰か仲の悪い状態望む人がありますか？」と問われれば、誰一人よう手を挙げないことでもわかる。

大体誰かが嫌いというのは、よく検べると当の相手の言行が嫌いなのであって、その人自身が嫌いなのではないことがわかる。彼は爪を噛むから嫌いといったふうに。それならば爪を噛むのを止めればいいので、その人が嫌いということではない。同様に山が嫌いという人も、実は蛇がいるからであって、本当は山嫌いではない。蛇また長いからということであれば、蛇自体が嫌いというのではなくて、〝嫌い〟の本体を検べてゆけば無限に後退してゆくばかりである。

とどのつまり〝嫌い〟というのは、人間の一時的観念に過ぎないことがわかる。トマトの匂が嫌いで食べない人も、何かの拍子で好きになることがあるが、トマトの方は一向に変化ないのに、自分の観念だけで好き嫌いになっているのである。同様にモチを見るのもいやという人は、その時の状態がちょうど満腹になっているからであって、やがて腹がへればまた食べたくなる。

よく考えてみれば、例え小便だって、黴菌だって、人の役に立っているのであって、この世に嫌いとするものは一つもない筈である。「まして人間同士の間に嫌いがあるはずがない。私自身人を嫌いになったことがない」と山岸は自己を吐露した。

ただし万物万人一体であるといえども、実顕地をつくる場合には、一遍にいけるとせずに、やはりやり方というものを考えねばならない。人間あまりにも永い間に色んな妙なものが沢山こびりついていて、一度にはいかないのでまず仲よしで、気のあった者同志から始めたらよい。そして我執をなくして本当に仲よくなるためには、学校へゆくがよい。何でも読めるようになるには、小学校でいろは四十八文字を習う必要があるので、五字や十字では読めない。まわりくどいみたいに思うかもしれないが、それがやはり近道なんだ、と説明した。

要するに実顕地づくりには、人の和が第一である。技術や経営問題は二の次で、第一に仲良し、仲良しであればみな必ず解決するとしている。その仲良しであるためには、好きになったり、嫌いになったりのあやふやな人間観ではダメで、根本的に人間は、人間を嫌いになり得ない理を知る必要がある、としているのである。人は人に結びつけられて逃れることはできない……と。

ただしここでもう少し補足説明しておくと、彼がそれほど無我執、絶対愛に基づく仲良しをいうのは、あながち実顕地づくりのためばかりとはいえなかった。山岸はむしろ実顕地づくりに伴なう危険性を感じてやってきているのである。というのは実顕地造成の提案がなされることで、会員の間に当時（今も）、実顕地に参画せざれば会員に非ずとするごとき風潮が流れていた。これは百万羽創設の時にも、百万羽に参画しなければ会員に非ずの雰囲気が会員の間に生じたのと同じであって、山岸はこれをむしろ是正するためにわざわざ岡山へやってきたのである。

そもそも岡山での会合は岡山から山岸の方へ働きかけたものではなくて、反対に山岸の方から、長

い試行錯誤の末に、ようやく辿りついた山岸運動の基本的性格を聞いてもらおうと、岡山の旧会員に呼びかけたものである。名古屋の会合にすら出ない山岸がわざわざ辺ぴな岡山を択んだのも実は、そのこと自体意味があるので、散在した地方の旧会員たちに対して彼の意志をまず伝えたかったのである。

山岸は「百万羽の結果あなた方は、忘れ去られたみたいなことになっているが、私の方では決して忘れたわけではない。今また実顕地造成の気運の中にあって、それに参画しない人があっても、一向に構わないのである。百万羽及び実顕地会員はあくまで、会員の中の一部有志の動きであって、それに参画しなければ会員に非ずというのは間違いである」という心持を体して、岡山に出かけているのである。

そのために研鑽会に参集しそうな旧会員たちを、山岸の方で名前をあげて呼びかけさせた結果が、石井宅での六十人もの大人数研鑽会となったのである。山岸は一番煎じが嫌いな人で、本来ならばやっとメドのついた運動の方針はまず山に持ってゆくべきところであるが、一番は岡山のあなた方に持ってきましたという意味もこめていた。最初の研鑽会は実顕地（有安宅）に非ざる、石井宅で開いているのも同じ意図を含んだものであった。

要するに実顕地に参画しない会員に非常に気を使っているわけであるが、それは、別段参画しない人の落ち込みや反感を心配しているわけではなくて、山岸ズム運動はつまるところ、無我執研鑽の山岸ズム生活が基本であることをいいたいためであった。

ただし山岸ズム生活が基本であれば、それは一人でも可能であるが、山岸ズム社会生活となると実顕地生活となるのである。

ここからすると、山岸は通常いわれているように、実顕地の地球的規模の拡大即ユートピアの完成というふうには考えていなかったもののようである。実顕地はモデル社会であって、モデルとしての機能を果す程度にあればいいので、必ずしも全土が実顕地になる必要はない。それはあくまで理想的として択ばれた一つの生活形態に過ぎない。もっといい生活形態があるかもしれない。その考えられる限りの理想生活態を大半の実顕地外の人にみせてゆけばよい――としていた。

それは恰もほんの少数の試験場対かなりの数の実顕地の関係のごとく、全国のかなりの数の実顕地対大多数の一般生活という関係になるのではないだろうか。ただし一般生活においても、山岸ズムの無我執研鑽だけは全地球規模にしたいというのが彼の念願だったらしい。

山岸会発足当時の初めに戻っていえば、そうした無我執研鑽生活と全土に散在する実顕地があることによって、人は自由に東へ西へ、南へ北へと移動できる。全土にめしと宿と友情ありで、『養鶏法』に「今の山岸式でも省力養鶏であるが、一層省力となり、二ヵ月間位、家族全員が揃って不在旅行しても、立派に経営出来る」（「改訂に当りて」）としているのも、単に技術、経営問題の意でなく、相互扶助の山岸ズムによる社会生活の在り方から可能とするものであった。

現に今、協同体から協同体へと全国を渡り歩いている若者が少くないのである。これを地球規模にして、全世界が流動的になる。極寒のエスキモーは何も生涯北地に縛りつけられていることはないし、酷熱のピグミーまた一生熱帯地に居住する必要はないのである。転地療養を必要とする患者は何の心配もなしに、土地を移動することができる。そうした流動社会を目指していたのが、山岸であった。

やがて何億年後かの地球消滅の日の至ることも考えて、山岸は地球人の他の惑星への移住（「月界

への通路」？）をも考えていた。

それらはみな一つのものの一局面ではあるが、その時々に応じて「怒り研鑽」が強調されたり、無固定・無定数がいわれたり、無所有共用こそと謳われつつ、紆余曲折しながら、ようやく運動の基本は無我執研鑽の絶対愛と打ちだされたのである。そして無我執研鑽の場として、新たに研鑽学校が設けられたわけである。より高度な人間変革のための場である。

ところがこの「一体高度研」における談話の最中、五時半頃に、突然、山岸は、「ああ、あかんの、頭痛くなってきた」と、隣室に入っていった。

次室に入った山岸は、一旦は床を敷いて横になったのであるが、すぐに起きて、足袋はだしのまま下へ降りて、少し離れた例の〝光がギンギンギラギラ〟の便所へ入って用を足した。そして用を足しながら山岸は慌てたように「こりゃいかん。こりゃおかしいぞ、こりゃおかしいぞ、医者を呼べ、医者を呼んでこい」とニワをせかしたのである。

すぐに医者を呼びに人が走り、当人を再び元の室に寝せて足袋をぬがせたが、この時にはもうかなり容態がおかしい。ニワはこれは危ないとみるや、咄嗟の間に、周囲の眼もあらばこそ、長襦袢も何もぬいで、上半身裸となった。それから同じふとんに添寝して、山岸の胸をはだけさせ、自分の体を押しつけてしっかと抱いた。ニワはかねて西式の健康法に、そういうやり方のあることを知っていたのである。山岸は「ああ、これで楽になったような気がする。あんたの精気をもらって楽になったようだ。これでどうやら収まりそうやな。もう医者呼ばんでもいいようやな」といい、医者を断わる使いのものを走らせた。

ところが断わりの使いのものがでて、これで大丈夫かなと思っていたら、またして「こりゃいか

ん。危ない、医者を呼んできて、急いで走って迎えにいかんかったら間にあわんぞ」と叫んだ。それからゲーゲーと荒い息をして「苦しいぞー」という。その後もひっきりなしに苦しんだが、それでも一時収まり、やがてこんこんと眠りかけて、ふっと眼を覚すと、ニワに「楽しく生きような、楽しく生きような。長生きしようね」といった。それから精一杯苦しい息の中から「西辻君、あのな本当に仲よくね、本当に仲よくね」と、同室の西辻に話しかけた。

外はどしゃ降りの雨である。山岸は「楽しく生きていこうな」といいながら、添寝しているニワの体を左手で優しく愛撫していた。

「苦労は私達二人で充分だ。あんた達は安心してついてきさえすればいいんだよ」

ともいった。

やがて医者がきて診察すると、血圧二二〇でかなり高い。皮下注射すると、十分ぐらいして足から全身にかけて冷えだし、腕が痙攣し始めた。医者の話ではこの年で血圧二二〇で命を保っている人は知らん、明朝まで持つかどうかわからんという。十五分程の短時間の間にすでに血色は激変している。盛んに吐きたがるが、これは脳性嘔吐であろう。頭が痛いというところをみると、すでに脳出血していると思われるとも医者は話した。

それでも七時過ぎまでの山岸はまだ意識の混濁はみられなくて、六時半頃には、「本当の本当は通じないままに死んでしまうのかな」と洩らしている。疾病の心得もある山岸とすれば、今自分の置かれた状況を明瞭に知っていたということになろうか。七時頃には「みんな好きや、仲よういこうな」と、ニワに優しくいい、ニワは「はい」と答えている。

七時を過ぎて小便をし、しきりと嘔吐を催すのであるが出ない。そして呼吸は次第に荒く激しくな

って、山岸は「ウフン、グッ、グー、ウーン」と盛んに苦しみの声をあげるようになった。別の医者が来て血圧を計り直したが、やはり最高が二一〇もある。

もはや症状は明瞭であった。「ぐっすり寝たらよいでしょう。脳溢血の発作前の症状でしょう。破れる前のクランプがきたので、時間がくれば戻るでしょうが、安静にして……」といい残して二人の医者は帰っていった。けれどその直後にはすでに山岸は、肉体苦痛の段階も過ぎて、ハーハーと吐息のみとなり、ニワは再び医者を、医者をと叫んだ。

八時半、山岸が昏睡状態となってなおニワは、奇跡を願って回復を待っていた。実際、意識不明となっても回復する例はないではないのである。山岸は無意識中にも始終「ウハァー」「ウーン」といっては手足をつっぱったりした。改めて二人の医者がきたが、こういう場合の手当てはブドウ糖と止血剤以外には薬はないという。ブドウ糖は出た血を呼び戻す作用をするが、一旦洪水のように溢れた血を一遍にひかすことは難しい。

ニワは頭の血をとることはできんだろうかと尋ねると、もう少し医学が進めば切開して血を吸いとる手術ができるようになるだろうが、現在では無理。脳膜に近い時には手術するが、それも東京とか先進国の大学ぐらいで、岡山近辺ではできないという。

結局、山岸はグースー、グースーと昏睡状態のまま、〇時五十分に脈搏は止まった。死因はくも膜下出血、くも膜とは脳の表面をおおう二層の薄い膜のうちの外層で、これと脳に密着する内層の軟膜との間への出血がくも膜下出血であるが、出血すると山岸が見舞われたとほぼ同様の、突然の激しい頭痛、嘔吐の発作から意識の混濁を経て、深い昏睡、痙攣、手足麻痺の症状となる。

ただし、このくも膜下出血は、脳出血が高齢者に多くみられるのに対し、若い層に多いのが特徴で

あり、発病して一～二日で死亡するのは全体の三〇％程度ということである。とすると山岸は脳機構的には青年を意味していたことになるし、そのあまりにも激しい生き方のために三〇％内に入り込んでしまったのである。岡山における条件も悪く、体が疲労困憊している上に、一日の夜も二日の夜も、どぶろくをもらって「おいしい、おいしい」とのんでいたのが祟った模様である。

山岸の肉体的生命が事切れてからも、ニワは狂乱の態で裸で遺体にとりすがって泣いていた。「アーアーン、こんなことってあるかしら。あなた、あなた、いやいやいや、エーン」ニワの余りにも激しい慟哭の前に、周囲はだまって眺めているしかなかった。ニワは「何とかならないものかしら」と山岸の額を叩き、鼻をひっぱった。しかし結局はどうにもならない。どうにもならないと知ると、またそれでニワは号泣した。

ニワの言によると、山岸は刻々と冥府に近づきつつある間もしきりと左手で、ニワの体を愛撫しており、医者の「御臨終です」のことばを聞いてなお体に左手の動くのを感じたという。周囲の者の思いなしか、生命の果てんとする前に山岸は、すごく優しい目をして「そうか、そうか、添寝しているのか」という顔付きをしてみせた。それを話すことでまたニワは悲しんだ。

それでも一時半頃にはやっといくらか常気を取戻したニワは「誰かお茶碗に水持ってきて、冷たいのでよいの、口拭いて歯を入れてあげるの」と洗い水の用意をさせた。山岸はおしゃれで人前で歯をぬいたことはなかったが、総入歯をしていたのである。それをきれいに洗って入れ直してやるというのだ。歯を洗うとニワは顔も拭いてやった。「ちょっとみんな手伝って」と着物をぬがせて、山岸の好きな寝巻に着換えさせてやった。

この間にも山岸の遺体は刻々と組織変化し、体は冷え、硬化し出している。遺体の処置が終ると別

室に移され、そこで遺体を囲んで、生前の山岸を偲んでの研鑽会が行われた。
夜が明けて遺体の始末が問題となった。旅の空のことでもあり、遺体は山岸ゆかりの地である春日へ運ぼうということになったが、すでに梅雨時でもあり、遺体が腐敗する恐れがある。それで岡山大学から、解剖学の先生に来てもらって、腐敗防止のためにフォルマリン注射をしてもらうことになった。

3

遂に山岸巳代蔵は倒れたのである。
それは真に当人の言行の通りの、劇的且つ急激な最後であって、山岸は恰も朽木の倒れるがごとく、あるいは早瀬の流れるがごとく性急にこの世を去っていったのである。
山岸は常に死に魅せられているところがあった。墓をみては「楽なな、楽なな」といい、「自殺アコガレ倶楽部」ができるならば、私も喜んで加えてもらいたいといっている。命なんかちっとも惜しくないといい、岡山の談話の最後の下りでは、ニワに「長い間ものすごく押しつけに聞こえ、厳しく感じましたが、今になるとこれほど頼りない人はありませんね。優柔不断、頼りないというか全然自分の考えを固持しない」といわれて、
「まあ自分でロボットやと思ってる。何というか頼りないので、自己弁明みたいだが、これを着てるのも本当は着たいことないのやで。じゃまくさいのや。汽車に乗ったり、食ったり、いろいろするのが——。本心いおうか、生きているのがじゃまくさいのや。何も要らんわ」

「ほんとにロボットや、死ぬにも死ねへんし、そやからどっちでもみなさん委せよ。出た先でしゃべるとそらあかんわといわれ、またどこかに廻される。その中に楽に寝たいのや。死んだ方がましやとなるがね」
と心境を洩らしている。彼の心の中には、絶えず絶望的(デスペレート)に死へ向かおうとする心性(精神分析学者フロムのいう死愛好(ネクロフィリア)か?)があったもののごとくみえる。それがようやく現実の死となってかねての宿願は充され、今は春日の丘で永久の眠りについているわけであるが、このロボットとなった自己、優柔不断な自己、何も要らん自己、死んだ方がましやの自己の中には、山岸巳代蔵という個我の部分の感懐の外に、もっと深刻な境地が隠されていたのである。
それは何かというと、潜行中の剛研鑽の反省において「人にはいろいろ見えるが、弱い弱い弱さを発見した僕」「他の人をよくしよう、脱皮させようなど一切廃業、一生やめよう」といっていることである。前者はともかく、運動を起こそうとするものが、「もう人を変えようとは思わぬ」とは一体どういうことか。
本心はむろん人に変って欲しいわけである。しかし山岸は人が人によって変わることは不可能、ということに気づいた。結局人が目覚めるのは、その人自身においてでしかない。仏教でいう菩提心の問題(目覚めへの心)でしかない。もし人を目覚めさせんとすれば、それは何がしかのお手伝い、誘(いざな)いでしかないことが、ニワとの体験を通じていやというほど思い知らされたのである。いってみれば自己と他人とは根源的には自他一体であるにしろ、自己の自己自身と他人の自己自身との間には、無限の距離があり、分裂が横たわっていることもわかった。
そこで「もう人を変えようとは思わぬ」となるのであるが、「人を変えない」山岸自身は一体どこ

へ行こうとしたのか？　となれば、そこに「弱い弱い弱さをみつけた僕」があることになる。彼が黄土に逝った当年の一月頃、わざわざ名古屋で行われていた研鑽会に電話をよこして「これからは優しさ一色でゆくことを、くれぐれも皆さんに伝えてくれ」と述べたそうであるが、彼は剛と強さから一転して、弱と優しさに徹して生きんとした。

彼自身はちょうどふぬけの木偶か、こんにゃくみたいになってしまったのである。そこからして優柔不断、ロボットみたいということになったのであろうが、私はその境地を仏教の世界になぞらえないわけにゆかない。それはあくまで山岸がそういう思いだったろうとする私の想像（実際に彼がそう思っていたかどうか、また彼がそう思ったにしろ、現実にそういう世界にあったかどうかとは別問題の）であるが、私は彼が菩薩行を意識的にとっている以上、永遠の大交響楽と呼ばれる『華厳経』の世界にあったと思われてならない。

「華厳経」にあっては、動物も、微生物も、山川も、草木も、高遠な形而上の領域も、そのあらゆる世界が一つの大いなる世界をなしていて、しかもそれが光の束であり、目覚めそのものであることを訴えかけんとしている。存在するあらゆるものの一つ一つが欠くべからざる楽団員であり、タクトを振っている見えざる指揮者は、華厳経の教主ヴィルシャナ（光）仏となっているのである。

このヴィルシャナ仏に無限に近づく行程として、十波羅密（十の境地）の菩薩行があるわけであるが、この十の段階の八番目が、「不動地」といって、菩薩の人格形成の最後の転回となっており、この境地から仏格の世界に入る、即ち大自然の運行に同化するとされている。この第八地は「無功用」（遊び）の世界ともいわれ、すべての働きがなくなり、身口意のすべての努力を離れてしまった世界である。そして菩薩は無功用になることによって、菩薩の個我性を全く離れてしまうのである。

あるいは山岸は、自らこの第八不動地に入った（入らんとしていた）ことを認めていたのではないかとするのが、私の想像である。時には死にも至らんとする修行を重ねて、人格の最高値を究め、遂に仏格の域に転換する（せんとする）ことができた――そう私は勝手に想像する。

そこに山岸の剛から弱への転換の現象も現われるので、菩薩行の六波羅密（布施・持戒・忍辱他）といわれるものは本来、極端な境地を持っている。六波羅密の第一は布施であるが、単に布施といっても、例えば虫けら一匹のためにも自分の命を捨てても構わない、とするのが布施の真意である。戒律についてもただ守ればよいのではなく、それが人を救うためならば、恐れずに悪をも行うというのが菩薩の戒律である。その意味では絶えず精神そのものの中に、本質的に逆説（パラドクス）を抱えているのが菩薩行である。

事実、山岸の修羅にも似た一時期の生活そのものが、それを証明していたといえる。

しかしこれが釈迦自身が教えた、仏の八正道（正見、正思、正語、正業他）となると、八つの正しい道ということで、その八正道を貫ぬく基本精神は〝中道〟となる。釈尊は中道ということで、極端な快楽や極端な苦行の極端を避けた。非常に冷静、沈着に、両極端を避けて一歩一歩目的に近づいてゆく。そういう一種中康と良識の行程を説いたのである。

私には剛研鑽を反省し、誰にも容易な、ただ普通の会話の中で我執を一つ一つとってゆく「盲従研鑽」の仕方をみつけた山岸が、これに相当するのではないかと思われる。（手紙の中では禅問答式の公案風のやり方をわかりにくいとして反省している）

弱い、優しさ一辺倒の方法というのも、結局はこの道を志したことになる。それがとりもなおさず、知的方法一辺倒の道となることも肉体を通してわかった。

仏の自覚にあった山岸は同時に、自己の理想境もまた自己の裡にあることをいよいよ感じとったろう。菩薩の最終境地としての第十金剛蔵菩薩は「示現一切仏国土身自性」と名ずけられる三昧に入っていて、疑いを抱くすべての大衆が金剛蔵菩薩の身体の中に入ってみると、そこにいくら長い時間をかけても説明することのできない仏国土があったとされている。いくらか幻視、幻聴の気味もあったらしい、イマジネーションの豊かな山岸の頭脳の中には、そうした真理の雨降る仏国土の世界が、ありありと描かれていたことが想像されてならないのである。

4

この仏国土の実顕を夢みていた山岸は、一つには自分に能力的に欠けるところがあることと、もはや自分の寿命はいくばくもないことを予知して、妻のニワに一足先に無我執人になってほしい、自分の後事をニワに托したいと願っていた。抱擁力と実行力のあるニワには、それが可能とみた。それ故に「世界のママ」といい、やがてみなニワにひれ伏すだろうとしたのである。

そして事実、死の間際において山岸はニワに無我執人が現われる直前をみているのであり、「こんなに、こんなに光り輝くんですよ」とギンギンギラギラをしてみせた。これはもう一度「華厳経」に戻っていえば、ヴィルシャナ仏自体が光の束であり、第一歓喜地で真理を悟って後の菩薩は、第三地では発光地といって、自利、利他の実践の中で、自分の内から智慧の光を放つことになっている。

むろんそれはあくまで可能性としての問題ではあるが、山岸はニワをそのようにみていたのである。しかもその思いを春日にいって、みなの納得するまで披瀝しようとも思っていた。それが実現さ

れることもなく、急ぎ山岸は冥府へ去ったものだから、ニワは没後塗炭の目に会わねばならなかった。

具体的には遺体の始末、墓のこと、籍の問題等があり、それらは何れも山岸ズムと重大に関りあう問題故に、春日でも緊急の騒論となったのである。遺体の問題については、今でも、「生前山岸巳代蔵は死後なお活かされるべく私の身は火葬するのではなく、川に流してくれればいいといっていたのであるが、世の一般常識の迎えるところとならなかった」(『Z革命集団』)としているが、ニワとすれば生前の山岸の意志を活かすためにも、遺体の始末は土葬で行い、墓もちゃんとつくることを主張して譲らなかった。

ニワによると、山岸は百万羽を創設すると同時に、自分たちの入る格好の墓地を一諸にみて廻っていた。そして一番環境のいい素的な土地を択んで、墓地の申請もしており、生きているうちにそこに「山岸巳代蔵、ニワ夫婦の墓」をつくろうといっていたという。それが周りからは宗教だと反対された。土葬についても、本人自身が火葬はいやがっていたから、執拗に反対したまでである。

結局、ニワの強力なる意志表示の結果、福里を山岸の籍に入れる問題は周囲に入れられなかったが、遺体の処置と墓の問題は通って実現することになった。

しかし結論が出るまでには、かなりの時間を要している。その間遺体は葬壇に据えられたまま、十日間も放っておかれた。それまでには前例のない山岸ズムとしての死者の扱い方の問題の上に、現実的には前妻志づ子の登場で一層紛糾を重ねたのである。

実は四日没後すぐに岡山へは、志づ子が遺体を引取りにやってきている。ニワとすれば志づ子を呼ぼうとは夢にも思わなかったが、子供には知らせる必要があるだろうと画家の純に通知したところ、

子供に同伴して志づ子がやってきたものである。「お渡しする遺体はありません」とニワは断った。志津子は、一旦は春日へ帰り、さらに人数を連れてやってきた。そして「お礼に一部差し上げましょう」「それでは半分」と魚の切り売りみたいな提案があったが、ニワは何れもはっきり、「遺体を損傷する気はない。間違いがあれば法廷でケリをつけましょう」と拒否した。

ところがいざ埋葬となって、志づ子が埋葬許可証を持って帰って渡そうとしない。そのうちに日も経って、遺体の足の爪先が変色し始めた。これはまずいと、警察に相談にいったら傍に番小屋をたてて、「遺体安置」ということにして仮埋葬したらいいというので、十日の日に仮埋葬が行われたのである。場所は、現在葬られている見晴しのいい、適当な空間のある西ヶ峰の一角とし、ここを以って「公人の丘」と称することとなった。正式に埋葬許可を得て、告別式が行われたのはその二十一日であった。

この日小雨そぼ降る中、午後二時より春日山第一研鑽会場へ、全国から三百余名の会員がつめかけ、会場へは全員入り切れず、参会者は場外に溢れた。葬壇には「Z革命」の垂れ幕が下がり、その上には山岸の遺体が掲げられ、左右には地方有志より送られた数々の生花、花環、御供物が飾られ、厳粛な雰囲気の裡に告別式はとり行われた。山岸の生前の遺影は、生ける姿そのまま、ほほ笑んで同志の語らいを聞くが如くであったという。

告別式につづいて一同降りしきる雨の中を歩いて、墓前に参集。「全人の父、真の人山岸巳代蔵先生、真の妻ニワ夫人、比翼連理の墓」と墨書された墓標の前で墓前祭を行った。主だった同志十六組の夫婦が手をつないで墓をとり囲み、一体の輪となって、力強く「仲よくやっていきます」と互いに心に深く誓いあった。輪をといては、山岸の作詞による「愛和の誓」を唱和した。

この告別の模様については、「ヤマギシズム」（「山岸先生特集号」六月十五日）が出されているが、記事中に「もともと一人から」（山本英清）という寄稿文がある。

内容は会発足間もない昭和二十九年春頃の話であるが、中心会員の間で会の在り方を巡って口論となり、とどのつまりYなる男は激して席を立っていった。その時傍らにいた同志の一人が「山岸会もこれでお終いどすわ、大事なAさんも、Hさんも出、とうとうYさんまで逃してしもうては……」というと、山岸は明るい南受けの光を背にして、実にやわらかく、優しいニッコリとした表情をして「もともと一人ですさかいなあ」とつぶやいたと回想している。

いい話である。福沢諭吉はつねに事業を起こす最初に、「いつつぶすか」の〝極端の覚悟〟を以って臨んだといわれるが、山岸またつねに一人の気持を抱いてやってきたのが、この運動だったといえよう。それが故にまた運動に芯が入って、会は飛躍的に伸びていった。その〝一人の人〟が今度こそ本当に一人の一人として、黄泉路に旅立っていった。

墓はさすがに旧来のものは排して、ニワがデザインした新しい思想にふさわしい、新しい形の、周囲に黒い玉石を敷きつめた、丸い盛土式の墓を考案して創った。

以後ニワは山にあって、毎日、夫の眠る頭の辺りにかがんで思いをこらした。今後の山の行末の問題を、地下の夫と共に考えつめていたのである。風が吹こうと、雨が降ろうとニワは「公人の丘」に通いつめた。雨が降っている時には、墓土に傘をかけてなおもかがみつづけていた。そうすることでニワの胸中には生前の山岸が蘇り、心の通いあううちにさらに具体案を練ることができたのである。

やがて山岸逝いて一年半にもなろうというのに、まだ「公人の丘」に一心にかがみ込んでいるニワの姿がみられた——。

後記

生前山岸巳代蔵は周りの人々からわからん人だといわれつづけてきた。本人自身だって、一つにはその想像才や具体才において抜群の能力を示しながら、主として表現才の不足から相手に容易に伝え得ないことを承知していた。山岸には、職業でいえば哲学者と技術家の両面はあっても、小説家の部分はあまりなかったともいえるのである。

私はこの「真人山岸巳代蔵」にかかわるに当って、もしそうならば私は山岸の代弁を勤めようぐらいの気持でやってきたのであるが、正直のところ今その生涯を書き終って、やはり山岸はわかり難い思いがしきりとするのである。言行に表現された限りでの一応の脈絡は辿ってみても、もう一つどうしても本格的にはわからん気持があって、それが私の胸の中からとれないのである。

私はかつての自著『評伝辻潤』において、その末尾で結局は辻潤は「暗示の人」、しかも負（マイナス）の生活の意味での「暗示の人」たらざるを得なかったことを述べたが、山岸巳代蔵また「暗示の人」、というよりは「秘密の人」であって、その秘密性において、彼に関心を抱くものには永遠の魅力足らざるを得ないだろうと思われる。

幸いにして、材料不足とはいえ、生前取組みの相手であった福里ニワさんから多くの、赤裸々な供述を得たとはいうものの、ここに現わされた山岸巳代蔵はとどのつまり、私の描く山岸であって、つまりは私が解釈し、創造した山岸でしかあり得ない。あるいはそれは、全くのフィクションかもしれないのであり、読者はここにある山岸巳代蔵から二歩も三歩も退いて眺められるのがよいと思われる。そういうことに私はためらいを感じない。

そしてもし仮にこの山岸像が実像に近いものとしても、そこから派生する問題というものがあるのであり、疑問もなしとはいえない。また山岸ズムと、その顕現体としての山岸会の問題といったものもある。それらの一切について、やはり当人のいう通り、「これでよしとせずに」探求されるのがいいと思う。

ともあれ私としては、本格的に人物に対したのは、辻潤に次いでこれで二人目である。そして辻潤同様、山岸は私に大いなる何かをつけ加えたことを感じとっている。辻潤においては、美的で文学的な何かであったとすれば、こちらは肉太で人間的な、そして行的世界にも通じるような何かであるように思われる。その感触を手がかりに、今後も山岸ズムの探求と展開を続けたい気持ではあるが、ひとまずはこれにて一本をまとめ、山岸巳代蔵を離れてどこか空閑地で休息したい。

終りに取材や討論に喜んで協力して下さった方たち、貴重な資料を提供して下さった方々にお礼を申し述べておきたい。また文中において、その方たちの敬称を省略させていただいたことをお断りしておきたい。この本にもし成果があるとすれば、その成果の半ばはあなた方の力添えによるものである。

一九五三年十二月二十一日記

昭和五三年 (7)

玉川しんめい

月刊『流動』七三年一月～十二月号に連載

玉川しんめい

昭和五年六月二十九日
富山市旅籠町十二番地生

〈著訳書〉
『評伝辻潤』（三一書房）
『日本ルネッサンスの群像』（白川書院）
『富山の写真人物志』（編著・ＪＣＡ出版）
『住民運動の原像』（共著・ＪＣＡ出版）
『中国アナキズムの影』（三一書房）
『若き毛沢東』（共訳・太平出版社）
『風俗越中売薬』（巧玄出版）

現在　滋賀県甲賀郡甲西町夏見七八九
電話〇七四八七(二)—〇二〇八

真人　山岸巳代蔵　　定価一二〇〇円

昭和五十四年一月三十一日　初版発行
著者——玉川しんめい
発行者——小山敦彦
発行所——流動出版株式会社
東京都港区愛宕一—二—二　第九森ビル
電話　〇三—四三三—七四六一
振替　東京一〇七五三四
印刷所——光邦
〇〇二三—〇〇二七—八九四二
落丁・乱丁の場合はお取り替えします

© Sinmei Tamagawa 1979